

全ての生徒がつながりをもって安心して学べる学級経営

松尾 頼亜(長崎大学大学院教育学研究科)

楠山 研(長崎大学大学院教育学研究科)

1.問題と目的

学校で求められることは年々増えてきている。現在の学校教育は、変化の激しいこれからの社会を生きるために、主に、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体をバランスよく育てることを目指している。また、OECD の PISA 調査の結果から、子どもたちの語彙力や読解力、コンピュータの活用など、これからの子どもたちに身に付けさせたい資質・能力も明らかになっている。その結果、学習指導要領には子どもに身に付けさせたい資質・能力がたくさん書かれている。しかし、教師の仕事は激務であり、ゆっくりと時間をかけてそのことについて考える時間がなかなか取れないのが現実である。

では今、その多くの資質・能力のうち、まず、何が社会から求められているのだろうか。2017 年に実施された日本経済団体連合会の新卒採用に関するアンケート調査結果の(4)選考にあたって特に重視した点では、「コミュニケーション能力」が 82%と高い数値を取って第 1 位となっている。続いて「主体性」が 60.7%で第 2 位、「チャレンジ精神」が 51.7%で第 3 位となっている。「コミュニケーション能力」は 2004 年から 15 年連続で第 1 位となっている。この結果も示すように、今社会からまず求められているものは、この「コミュニケーション能力」といえるのではないのだろうか。

「コミュニケーション能力」に関する指摘や調査は中央教育審議会でも挙げられている。平成 20 年「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」では「いわゆる小 1 プロブレムや学級崩壊などに見られるような自制心や規範意識の希薄化、生活習慣の確立が不十分であることや問題行動等、いじめやいじめによる子どもの自殺、体力の低下など、子どもたちの心と体の状況にも課題は少なくない。また、自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない。学習や将来の生活に対して無気力であったり、不安を感じたりしている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど人間関係の形成が困難かつ不得手になっているとの指摘もある。」とある。また、平成 22 年、中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の出した「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(第二次審議経過

報告)」では「働くことへの関心・意欲・態度、目的意識、責任感、意志等の未熟さやコミュニケーション能力、対人関係能力、基本的マナーなど、職業人としての基本的な能力の低下や職業意識・職業観の未熟さなどが多く指摘されている。」や「最近10年間における学卒人材の質の変化については、変わらないと感じている企業が多い一方で、約3分の1の企業が人材の質が低下したとも感じている。また、早期離職の割合が高い中、離職の理由として仕事に対する適性や人間関係をめぐる課題といった項目が挙げられることが多い。このように、社会や仕事で必要な基礎・基盤となる能力が社会に出るまでに十分身につけていないことによって、社会へ円滑に移行できない原因の一つになっていることがうかがえる。」とある。

では、この「コミュニケーション能力」とは具体的に何を示すのだろうか。文部科学省のコミュニケーション教育推進会議においては、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義されている。また、「中教審 教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チーム(第3回)配布資料5 言語能力について(整理メモ)」では、「コミュニケーション能力は、話す・聞く・書く・読むといった言語活動のほか、非言語による伝達(イメージ、音、身体)も含めた広範な活動に関わるものである。」と記されており、「コミュニケーション能力」の中にも多くの能力が存在する。

筆者は学部時代に地元の中学校で部活動指導をしていた。活動中は子どもたちに何のための練習なのかを考えさせるために質問をしていた。子どもたちは自分の言葉で言語化することで練習意欲やプレーの質が向上していた。その中で、良い意見があるのに自分に自信がなくて意見を言えない生徒であったり、話をしているのに話を聴けない生徒がいたり、先生の話は聴けるけれども、友達の話が聴けない生徒がいた。また、学校生活と部活の時間で態度が違う生徒もいるという話も聞き、部活中はできるのに学級ではできない生徒も存在するという事が分かった。

ここで私は、どのような手立てを取れば、子どもたちが上手く自己主張できるようになるのか。また、どのような手立てを取れば、人の話を聴けるようになるのか。これを学級経営の側面から研究したいと考えた。「話す」と「聴く」の2つを考えたときに、相手の立場に立って考え、相手のために態度を考えることができる「聴く」に注目し、研究を進めることとした。

藤枝らや金山らの「小中学校の教師や保護者を対象とした調査」によると「上手に相手の話を聞く」や「自分の意見や考えをはっきりと伝える」などの「聴く」と「話す」スキルに対するニーズが高くなっているという結果が出ている。金山らは中学生を対象とした「積極的な聴き方スキル」尺度を開発し(2004)、聴くス

キルと学校生活満足度の関連を検討している。その中で、聴くスキルを「不適応状態にならないために身に付けておくべき基本的なスキル」と位置付けている。さらに高校生(藤原・濱口、2010)においても聴くスキルが親和動機や学校生活満足度と関連を有することが確認されている。

つまり、生徒の「聴く力」を育てることは学級内や学校内での対人関係を良くし学校生活満足度の向上につながる。また、他人に対して受容的な態度をとることができるため、学級内で安心して自分を表現することができ、相手の個性を認め合い、相手のことを支え合い、学び合い、生徒同士が繋がりをもつことに必要であると考えられる。

また、生徒のそもそもの人間関係構築に関して「聴く力」の育成以外の手立てを考えた。小学校段階ではよく学級単位で遊んでいることに注目し、中学校段階でも遊びを取り入れることで生徒の人間関係を育むことができないかと考えた。エクササイズ(遊びの要素を取り入れた活動)と称し、朝の短学活の時間や昼休みの時間を利用して、エクササイズを取り入れ生徒一人ひとりが学級内の全員と関わられるようにする。

本研究では「聴くスキル」を育てることとエクササイズを行い、学校適応との関連を検討し、人間関係の構築やつながり、学校生活満足度の向上だけでなく、グループ活動やペア学習の活発化、個性の認め合いや支え合い、思考力の向上、どこでも誰とでも話せる学級の雰囲気を作ることを目指す。

2.方法

(1) 聴くことを考えさせる授業

公立中学校の1年生1学級31名を対象に特別活動の時間を用いて「学級の話聴くときのルール5箇条を決めよう。」というテーマで授業を行った。

① 生徒の実態把握

日常の生徒の様子から聴く態度を観察する。朝の会や帰りの会、すべての教科の授業、また、休み時間など生徒同士の関わりについて観察を行う。

② 聴くときのルール設定

子どもたちが普段、話を聴けていない様子を写真に撮り、提示し、実生活での聴く態度について振り返らせる。課題意識をもたせ、学級の話聴くときのルールを生徒自身に考えさせ、学級会を通して決めさせる。

③ 聴くときのルール設定後の聴く態度の観察

各教科において、教師が話しているとき、生徒が前で発表しているとき、ペア学習で話しているとき、グループで話しているとき、全体活動のときや学年集会や全校集会のときに学級で考えたルールを意識した行動ができているか観察する。

(2) エクササイズ

朝の短学活の時間や昼休みの時間を利用して、計10回連続してエクササイズ

を行う。いろいろなエクササイズを通して学級内の生徒同士が関わり合い、学校生活での緊張感や朝のだるさを楽しく払しょくできるようにする。主観的な視点での観察と Q-U を用いた客観的な視点から人間関係の変化や学校生活満足度の変化の考察を行う。Q-U 調査は公立中学校 2 年生 4 学級 154 名を対象に行った。

3.結果と考察

(1) 聴くことを考えさせる授業

① 授業前の生徒の様子

話を聴こうとする場面も見られ、一分間スピーチなどでは全員が手を止めきちんと発表者の方を向いて聴こうとする態度がみられた。しかし、教師が決めた係りからの連絡や司会者の進行のときなどは手を止めて、机の上には何も置かないというルールがあるのにもかかわらず、ほとんどの生徒が自分のことに集中し、耳で聞き流す程度であった。教科の授業に関しては、教科によってできる時間とできない時間があり、ここでも子どもたちの中で何か区別している部分があるように感じた。グループ学習では、誰かの意見を班の意見として出し、班で話し合っ班の意見とすることは少なく、深い話し合いは行われることはほとんどなかった。調べ学習なども、他人任せにする生徒が多かった。休み時間では、比較的仲の良いグループでいるため、お互いの話を聴き合うという事ができていた。

② 授業中の生徒の様子

授業の導入部で生徒が普段話を聴けていない場面を写真で提示したときに「あ…。」と一瞬教室全体が静かになった。普段の生徒自身の生活を実際に写真や動画で振り返る機会というものがなかなかなく、とても効果的であった。生徒の感想の中にも「普段自分は聴いているつもりだったけど、写真で見ると話している人からは聴いてないように見えるからきちんと相手の方を見ようと思った。」とあった。初めに学級のルールを個人で考えさせた時には、5 つ考え切れる生徒は少なく、できても 2,3 個の生徒が多かった。次に班で考える時間を設けた。それぞれの意見を出し合い、お互いの意見を聴き合いながら、似たような意見を合わせて新しいルールとしたり、話し合いの中で全く別の新しいルールを見つけ出したり、とても活発な話し合いが行われていた。最後に学級会を行ったが、特定の生徒同士の意見の言い合いになってしまい、全員が参加できなかった。中には意見を発言している生徒の話を聴いて、さらに良い意見にしようと考えている生徒もいたが、数名は自分に関係ないと話を全く聞いていない様子であった。多くの生徒は発表者の方を向き、耳を傾けることができていた。

③ 授業後の生徒の様子

授業当日の帰りの会では学級委員が中心となって呼び掛け、学級のルールを守ろうとする生徒の様子を観察することができた。普段の帰りの会とは違い、教科連絡や係りからの連絡の時は手を止め発表者の方を向いて聞いていた。反応も良く話し手の立場に立った聴き方ができていた。しかし、一週間後の実習の観察で

は学級のルールは生徒たちの意識の中からなくなっていた。生徒たちの様子は授業前の観察と同じような朝の会や帰りの会、授業中のグループ活動の様子と同じであった。

(2) エクササイズ

① エクササイズ実施前

学級会の時、子どもの発言に「話を聴きたくない人の話はそもそも聴きたくない。」というものがあった。全く予想もしなかった発言だが、よくよく考えるとその生徒の言うとおりでであると感じた。しかし、学級の中でそのような発言が出てしまうことは残念であり、子どもたちの学級内での人間関係をもっと良くする必要があると考えた。子どもたちがもっと授業以外に関わり合える時間を増やすために何ができるのか考えた。

現状、学級はいくつかグループが存在し、授業以外の時間はこのグループでそれぞれ過ごしている。グループは男女でわかれており、大まかに男子グループ A、男子グループ B、男子グループ C、女子グループ A、女子グループ B、女子グループ C となっている。グループ内での活動は活発的であり、休み時間は会話が弾んでいる。また、私に話しかけに来る際もグループ単位で話しかけに来ることが多い。授業中にフリーで活動する際も初めは近くの友人と活動するが途中から仲の良いグループで活動しだし、最終的には男女で学級が分かれてしまうという事が何度かあった。グループ間での交流は多くなく、あっても活発な男子グループ A と同様に活発な女子グループ A の生徒が授業中や行事などで関わるくらいである。こういったグループがあるためか、授業中のグループ活動にも偏りがあり、活発に行われる班やそうでない班が出てきてしまっていた。

② エクササイズ実施中

始めは取り組みに時間がかかり、グループで活動を行っても個人で取り組む班も多かった。しかし、2 回目からは班員と協力して取り組むことができていた。個人戦で友人と競ったり、班対抗で班員と協力しながら他の班と競ったり、筆者と学級で競ったりするエクササイズを通して、男女や学級内のグループ関係なく話すことができていた。普段なかなか話さない生徒でもエクササイズという比較的取り組みやすい活動を楽しみながら行うことで自然と会話が生まれ、温かい雰囲気が出来ていた。普段おとなしい生徒が活躍したり、いつもグループ学習に積極的ではない生徒のひらめきで解決できたりすると自然と拍手が起こっていた。また、わからない時に自然と教え合う姿も観察することができた。

③ エクササイズ実施後

朝からエクササイズを通して、級友と話すことで楽しい雰囲気で一日を始めることができていた様子であった。朝の会終了後もそのまま生徒が話し込むこともあり、席が近くの生徒以外とも会話をすることがあり、学級内に会話の輪が広がっていた。教科の授業で、いつもはグループ学習を始めるのに時間がかかっていた。

る場面が多かったが、エクササイズを行った後の最初の授業ではスムーズにグループ学習を始めることができ、活動も活発に行われていた。隣の学級の生徒にエクササイズの問題を持っていき会話している様子も観察できた。

④ Q-U との比較

エクササイズ実施前と実施後の Q-U 調査の結果と照らし合わせてみると実験群の 1 学級では学級との関わりに関して、得点が高くなった生徒が他の統制群の 3 学級と比べると増えていた。また、実験群の学級は学級との関わりに関して得点が下がった生徒も統制群の 3 学級と比べると少なく、実験群の 1 学級の学級との関わりに関しては有意差がみられた(図 1)。しかし、実践期間中、学校行事などと重なったため、エクササイズが必ずしも影響したとは言えない。

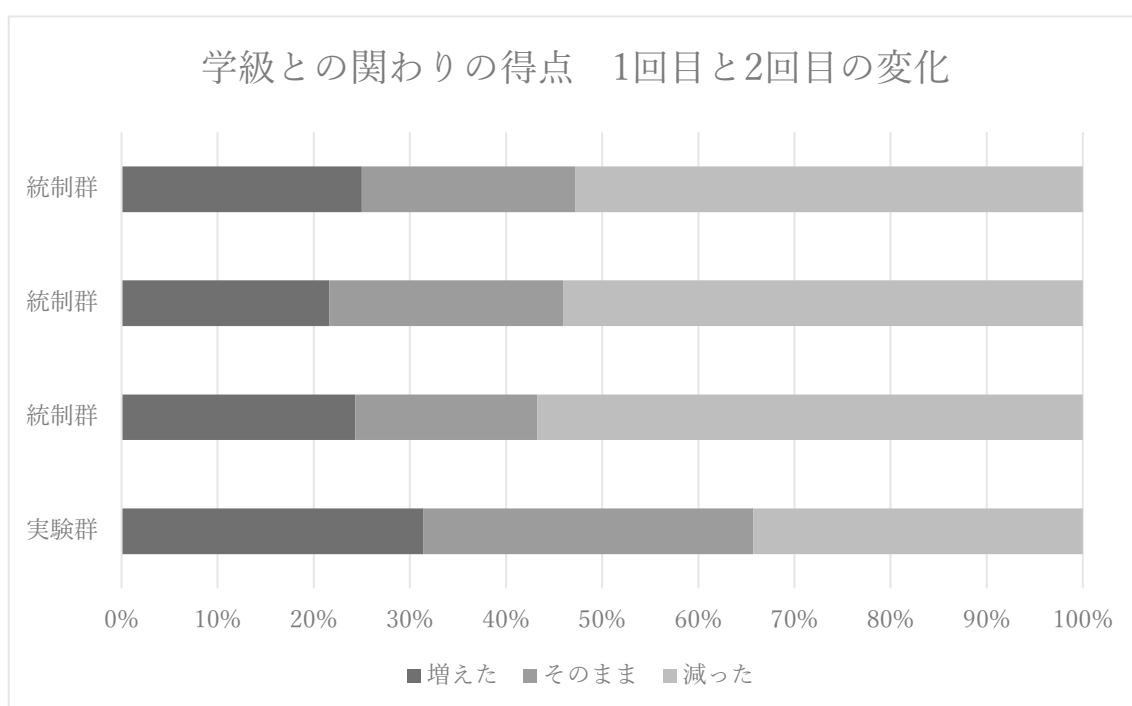


図 1 学級との関わり得点

4.まとめ

聴く力に関して、実習生という立場や週 1 回の実習ということもあり、生徒に話を聴く力を身に付けさせることの難しさを感じた。そもそもルールが 5 つという事が生徒にとっては多く覚えにくかったことも考えられる。学年の先生にも協力をお願いし、どのような場面でも言い続けることが必要であると強く感じた。そのためには、毎日生徒が学校で過ごす時間、朝の会や帰りの会、教科の時間に取り組みを入れ、「聴くスキル」を定着させることが必要であると感じた。

これからは教師として意識して人の話を聴く活動を取り入れることを行っていきたい。また、話を聴くことについてもっと生徒の立場に立って考えていきたい。今回は自身の経験から話を聴くことは大切だと考え生徒に身に付けさせたいと思

い、研究を行ったが、生徒自身がどのような能力を身に付けさせたいのかを知る必要があると感じた。学級の話聴くときのルールを考えることはできるのに実践することが難しかったのは、筆者の思いと生徒の思いが一致しなかったことも原因としてあげられる。生徒自身が身に付けたいと思わない限り、なかなか身に付けさせるのは難しいと思う。何年経っても生徒の本当の力として身につくように、一回の授業だけでなく、他教科や日頃の生活でも意識できるように、学校と連携して指導を行えるようにしていきたい。

エクササイズに関して、学力に関係が無い、誰でもできる活動を行い、みんなが同じ立場で考えることができたことが良かったのではないかと考える。多くのエクササイズを考えていたが、生徒の盛り上がりを考えて同じものばかりになってしまった。もっといろんなエクササイズを行うことで生徒の新たな一面を観察することができたかもしれない。日常生活にどう反映しているかはうまく観察することができなかった。朝から学習班で行うエクササイズが、どのように授業中のペア学習やグループ学習に結び付くのか、もっと観察する必要がある。

エクササイズについて、もっとたくさんの活動が世の中にはあると考える。「中学生」や「教育」などに縛られずに、目の前にいる生徒にとって何が今必要なのかを考え、自分自身遊び心を忘れずに、毎日楽しむことができるエクササイズを実践していきたい。実践中もうまくいくグループ、いかないグループがあったのでもっと生徒の実態把握を行い、すべてのグループが楽しむことができるようにしていきたい。また、授業にどう影響しているかなどは自分の主観でしかみとることができなかったのも、他の教師にインタビューなどを行いながら生徒の様子を把握していきたい。実践期間が学校行事と重なったため、学校行事が無い時期にも実践を行い効果があるのかも検討していきたい。

引用文献

○日本経済団体連合会 (2017) 「2017 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」

www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf 2019 年 1 月 9 日確認

○文部科学省 (2008) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm

2019 年 1 月 9 日確認

○中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部 (2010) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(第二次審議経過報告)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/sonota/1293955.htm

2019 年 1 月 9 日確認

○藤枝静暁・新井邦二郎（2008）「千葉県、神奈川県、東京都の小・中学校教師を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査」 Bulletin of Tsukubai Developmental Clinical Psychology, Vol19

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=16580&item_no=1&page_id=13&block_id=83 2019 年 1 月 9 日確認

○金山元春・中台佐喜子・前田健一（2003）「中学生の保護者を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査」 広島大学心理学研究 第 3 号

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00019421> 2019 年 1 月 9 日確認

○金山元春・中台佐喜子・前田健一（2004）「中学生の積極的な聴き方スキルと学校適応」 広島大学心理学研究 第 4 号

<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00019408> 2019 年 1 月 9 日確認

○藤原健志・濱口佳和（2012）「中学生の社会的スキルと親和動機・学校生活満足度の関連－聴くスキルと主張スキルに注目して－」 Tsukuba Psychological Research

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=26923&item_no=1&page_id=13&block_id=83 2019 年 1 月 9 日確認